

地域の子供たちが憧れる、いきいきと輝く女性農業者を目指す

麓 farm

※2018年3月現在

代表者名	齋藤 暢一	資本金	—
設立年	—	売上高	42百万円 (2016年12月期)
事業内容	生産 (ネメシア、ラベンダー、ダイアンサス)、消費者直売	経営規模	生産施設 1,200㎡
従事者数	6人 (うち女性4人。女性内訳: 役員1人、常勤パート3人)		
女性活躍支援	<p>[女性に配慮した取組み、実績のある制度・支援]</p> <p>看護休暇、母性健康管理のための措置、その他の仕事と家庭の両立支援、家族経営協定締結</p> <p>[女性に配慮して取組んだ環境整備]</p> <p>施設設備関係 (休憩室・屋内トイレ)、重労働等の業務改善</p>		



経営概況

北アルプスや南アルプスなどの名峰が見守る原村は、八ヶ岳山麓のなだらかな傾斜地に広がる高原の村。昼夜の気温差が大きく、晴天率が高いという環境から、花き栽培に適した土地で知られる。齋藤暢一氏・志穂氏の夫婦で共同代表をつとめる麓 farm は、この地で2012年創業。原村には志穂氏の実家があり、父の代からシクラメン農家を営んでいる。志穂氏は医療系大学卒業後、理学療法士として働き、同じ病院で介護福祉士をしていた暢一氏と結婚。子育てはのんびりと田舎でいたいと、2010年にUターンした。当初は農業を継ぐ気はなく医療関連に就職する予定だったが、

志穂氏の父が育てるシクラメンの美しさに暢一氏がいたく感動したことが転機となり、就農を決意した。旧青年就農給付金を活用しながら両親のもとで2年間修業後、3年目に経営を分離し、村内で農地を借りて独立。父とは品目を変えて、ガーデニングで需要が伸びる花のポット苗の生産を行う。その9割近くが、園芸店から「今年はこの色が売れる」などの要望に応えた商品を直接配送する“リクエスト生産スタイル”。安定した収益が見込める受注生産に近い形で取引先が増え、売上が順調に伸びている。2016度の売上は前年度より1.2倍に増え、初年度が900万円だったのが創業4年目で4,000万円を超えた。雇用も広がり、現在は4名のパートが勤務。そのうちの1人が2018年度から正規雇用に昇格する(30代男性)。



1. 経営者の理念・意識改革

志穂氏が就農していちばん驚かされたのが、男性優位の業界事情だった。地元では農業に携わる女性を「妻が夫の仕事を手伝っている」とみなされる雰囲気がいまだに残っていた。創業時に家族経営協定を結び、共同経営者として覚悟を決めて

就農した志穂氏にとって、これは非常にショックなことだった。そこで女性の共同経営者として認知してもらえるように、営業や商談、交流会に積極的に参加。最初は女性が商談に同席することや、男性主体の会合に参加することに批判の声もあった。しかし、花のエンドユーザーはほぼ女性であることから、生產品目や資材の選定に女性の意見を取り入れるなど、女性の視点を経営判断に活かす方針はぶれることはなかった。こうして懸命に取り組む志穂氏の姿勢が認められ、経営が上向きになる結果をしっかりと出したことで、周囲からの応援の声も増えてきた。「女性が元気で楽しそうに働いている」という評価は取引先にも好印象を与え、信頼関係の向上にもつながることを実感したという。

2. 女性のキャリア形成

もうひとつ、志穂氏が感じたことが、地域の女性農業者の横のつながりの乏しさだった。この現状を打開すべく、各種研修会や勉強会に積極的に参加し、現在は県内の若手女性農業者による「NAGANO 農業女子」のコアメンバーとして活躍中だ。2017年には農林水産省補助事業の「女性農業次世代リーダー育成塾第4期生」として全国から選抜された35名の女性農業者とともに農業経営を学んでいる。同じ志を持つ仲間元気もらい、仕事をする上での大きな支えになっている。こうしたつながりを地元にも作りたくと、2017年に原村地区では初の若手女性農業者グループを設立した。これまでに地域の農業改良普及センターと協力し「手荒れ予防の石鹸づくり」、「味噌講座」などの女性が楽しめる交流会を行ってきた。活動の目的は「農業に関わる女性が自分らしさを大切にしながら、いきいきと輝けること」。幼少の頃は農家の娘でいることが嫌だったという志穂氏。その頃に農業の楽しさを教えてく

れる大人と出会っていたら、もっと印象が違っていたと話す。地域の女性が誇りをもって農業に取り組むことで、地域の子供たちがいつか自分もやってみたくなる、かっこいい職業に変わる。そんな未来を託しながら、交流会の活動を続けている。

3. 女性が働きやすい環境の整備

現在の女性パートは3名。創業の2012年に誕生した長男と同じ保育園に通ったママ友つながりのメンバーで、子育てと仕事が両立できるように希望の日時で働けるシフト制を取り入れている。重労働を少しでも軽減するため、土詰め機や軽量コンベアなどの各種機械類も導入した。ユニークなのは、「作業に支障がない程度の雑談は容認している」という点。「家庭や子育ての悩みを語り合いながら、植物に触れて元気をもらい、また明日も仕事に来ようと思える職場にしたい」という志穂氏の思いが通じ、スタッフが意欲的に仕事に取り組んでもらえるおかげで、一定の質を維持しながら生産量・売上ともに増加している。こうして農場を支えてくれる彼女たちには、ボーナス替わりにおしゃれで機能的なアウトドアウェアを作業服として支給。農業者としていきいきと楽しく働くお母さんを応援している。

審査委員の声

30代若夫婦がUターン。夫婦で共同経営という意識、かっこいい農家を目指す姿は次世代の明るい農業を感じさせられた。親御さん含む地域の農業の先輩たちからの応援、園芸店との良好な関係構築、地域のママたちの雇用創造を自然体で行っている。また旧青年就農給付金を経営体の成長に有効活用している。現在描く地域住民が集う事務所づくりや学校との連携により子供たちにかっこいい農業スタイルに触れる機会を増やしてほしい。